

端末・サービス多様化を加速

Androidは組み込み機器の開発効率を向上させ、通信機能を備えた多種多様な端末を生み出す。そこには、クラウドサービスを展開するビジネスを劇的に変革する可能性が秘められている。

文 坪田弘樹(本誌)

Androidが増殖している。

とは言っても、モトローラの「DROID」が販売開始後1週間で25万台売れたり、チャイナモバイルが「13億人市場」に「OPhone」を投入したり、はたまたグーグルブランドの「Nexus One」が発売されたりといったスマートフォンの話ではない。“非電話系”の組み込み機器用プラットフォームとしてのAndroidの利用が進んでいるのだ。

その勢いを強烈に感じさせたの

が、2009年11月にパシフィコ横浜で開催された組込み総合技術展「Embedded Technology 2009(ET2009)」だ。Androidを組み込み機器で活用するための共通フレームワークの開発等を行っている一般社団法人「Open Embedded Software Foundation(OESF)」の会員企業がIP電話機やセットトップボックス(STB)、カーナビ、電子ブックリーダー、MID(Mobile Internet Device)など、多彩なAndroid端末を発表し

た(写真)。開発企業の多くは端末販売とともに、アプリ配信やサービス提供も含めた新たなビジネスモデルを模索しており、Androidプラットフォームを活用した新ビジネスの萌芽があちこちに見られた。

また12月には、NTT東日本とNECビッグロブがAndroidプラットフォームを採用した新事業を発表した。Webタブレット型の端末(右下写真)を販売し、アプリ・コンテンツ配信でも収益獲得を目指す。さらに、PCや携帯にはない特徴「タッチパネル操作、薄さ・軽さ、画面サイズ等」をアピールし、これをフレッツ光やISP事業の会員増にもつなげたい考えた。

企業規模も業種もまちまちな多数のプレイヤーが集まるAndroidプラッ



「Embedded Technology 2009」に登場したAndroid端末。タッチパネル端末で飲食店の受発注を行ったり、カードリーダーの制御に活用するなどの業務向けシステムのデモも登場した(左上と左下)。右上はアーチャーマインド・テクノロジーのAndroid搭載カーナビ。右下はKDDI研究所によるAndroid搭載STB

NTT東日本のAndroid端末「光iフレーム」。液晶サイズは7インチで、無線LAN機能を搭載する。タッチパネルで簡単に操作できる